

臨時休業から得る授業改善への一考察

—高校学習段階における スローラーナーとの授業の在り方—

松尾 真太郎 (MATSUO Shintaro)

神奈川県立新栄高等学校

要約

新型コロナウイルス感染症拡大から、政府による緊急事態宣言を受け、学校教育が2020年3月より前代未聞の、そして長期にわたる臨時休業に直面したことは記憶に新しい。この臨時休業はこれまでの学校教育の在り方について、生徒や保護者、教員、行政その他関係諸機関に多くの問題意識を投げかけるものになった。これまで誰もが「当たり前」として疑うことなかった授業スタイルや学校行事の在り方、部活動の指導方法など、場合によってはこれまでの習わしを根底から覆すような結果も招いていることは承知のとおりである。

このような状況において、本論では、筆者の勤務校三年生への対応を例にとり、主として以下の点に焦点を当てて考察を深める。

- (1) 臨時休業中の学習支援の在り方。(授業方法、課題の内容や提出方法、評価方法など。)
- (2) 臨時休業を経て、現在に至るまでの授業の変化。(授業スタイルの変化、教員や生徒の授業に対する意識の変化。学年団の視点、英語科の視点、担任の視点、筆者個人の視点などから見えてきたもの。)
- (3) 生徒との関係性構築方法について。

拙い実践報告ではあるが、高校教育段階でスローラーナー¹に対する学習支援の在り方を切り口に、小学校や中学校、大学の先生方と連携を図り、この難局を乗り切るための糧としたい。

多くの議論を通し、感染症拡大収束の見通しが立たない中でも授業改善の継続をベースに、生徒の自己実現に資する英語教育をより一層充実させるため、筆者自身の実践報告も交えながら多角的多面的に考察し、生徒の学びを止めないために我々ができることは何であるのかを整理することも本論の目的である。

(キーワード：授業改善，スローラーナー，ハイブリッド型授業)

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2020年3月から突如始まった全国的な臨時休業は、当初の予測に反し長期化した。本校を一例にとってみると、2020年度の学年末試験のとりやめ、通知票の生徒への渡し方の検討、卒業証書授与式の形態変更、高校入学者選抜試験の合格発表の形態変更、2021年度の教科書販売の形態変更、新クラス発表方法の検討等々、学校運営に大きな影響を及ぼす問題に数多く直面した。また、これらの問題の多くは今までに直面したことのない問題であったため、その解決に難しさを感じた年度末及び年度初めとなった。

全国津々浦々の小中高等学校及び大学などにおいても同様の問題に手を焼いたことは想像に難くないが、この騒動の開始からおおよそ一年が経過した現在、自省の念を込めて改めて当時の対応を振り返り、できたこと、できなかったことを整理したい。このことは、あっては欲しくないことだが、今後いつ直面するか分からない再度の臨時休業に対して、学校が支える教育活動の質を落とさないためにも、さらにはこれまで以上の質に近づけるためにも有益なことであり、大きな意味をもつ。そして自らの取り組みを振り返るのみならず、自校と似たような状況、環境に置かれた学校、あるいは普段の交流が少ない他校種、これまでは遠くに感じていた他地域からの実践例に学び、情報を共有することで、学校そのものがブラッシュアップされることが期待される。

本稿では、筆者の勤務校第三学年を例にとり、論を進める。様々な問題の中から学習支援の在り方を中心に据え、学校としての考え方、学年としての考え方、教科としての考え方、担任としての考え方、筆者自身の考え方、場合によっては校務分掌としての考え方など、臨時休校に直面して浮かび上がってきた数多くの問題について、あらゆる視点から多角的多面的に検討し、今後の授業改善の方向性を提案することを着地点とする。その過程で各種の問題点を細分化しながら、それでいて大局観をもって英語教育の今後の方向性にわずかでも寄与することができるのであれば、望外の喜びである。なお、本校の英語学習者は、ほぼ全員が「スローラーナー」であり、彼ら彼女らとともに創る「授業共創」の視点に重きを置く。

小学校では2020年度から、中学校では2021年度、高等学校では2022年度から全面実施される次期学習指導要領（以下、新指導要領）にも謳われる「主体的・対話的で深い学び」や、「学びに向かう力」といった重要概念からの視点をも交えながら、授業改善への糸口となるような、ひとつのケーススタディーとして捉えていただきたい。

2. 実践背景

2.1 実践校紹介

筆者の勤務する神奈川県立新栄高等学校は、横浜市北部に位置する、全校生徒1,000名を超える全日制普通科の高校である。一学年約340名から成り、各学年9クラスで編成されている。1983（昭和58）年4月に第1期生を迎え、2020年は第38期生を迎え入れた、比較的新しい学校である。英語科教員数は非常勤講師も含め13名で、これにALT1名を加えた計14名が基本になる。

卒業後の進路が、就職・専門学校・短期大学・四年制大学などと多岐にわたる点が特

徴である。「心豊かで、たくましい人間を育む。」という教育目標のもと、個々の生徒がそれぞれの興味や特性を活かし、同じ教室内で学び合っている。授業はホームルーム単位を基本としながら、第2学年次以降の選択科目では少人数授業が多い。様々な学力層の生徒が集っているため、授業構成や教材準備、グループワークなどをいかに活用し、生徒の英語力向上に繋げていくかは、自分自身、試行錯誤しており、コロナ禍以前より常に向き合っている課題である。

3. 実践報告

本章では2020年3月を臨時休業前期、4月と5月及び分散登校が開始された6月を同後期、と便宜上名付けて論を進める。最後に7月以降から12月までを臨時休業明けと一括りとし、松尾(2020)を詳述していく。

3.1 生徒が抱える不安の具体と対応

この時期は突然の臨時休業から生じる、生徒の不安への対応に重きを置いた時期である。では生徒の不安とは何を指すのか、以下毎学期末に実施される授業アンケートの一部として集まったものと、普段の何気ない会話の中から集まった実際の声の集計結果として示す。

表1 臨時休業前期(2020年3月)に生徒が感じていた不安の具体²

	具体例
授業への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・途中で終わった単元はどうなるのか ・課題が出るのか ・課題が出るのならばどれくらいの量をいつまでに提出するのか
定期考査への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・学年末試験は実施されるのか ・進級できるのか ・成績はどのようにつくのか
部活動への不安	<ul style="list-style-type: none"> ・練習はできるのか ・公式戦はできるのか ・合宿はできるのか
その他の不安	<ul style="list-style-type: none"> ・進路活動についてこれから考えていくつもりだった ・オープンキャンパス、職場見学は予定通り実施されるのか ・入試等の要項が出る時期や推薦基準等は変更されるのか

3.1.1 授業への不安についての対応

突然の臨時休業開始となり、特にコミュニケーション英語Ⅱについては非常に区切りの悪いところで授業も途絶えた。これに伴う単元の扱いと教科書の扱いは、学年の英語科として授業担当者間のコンセンサスを得たうえで以下の通りとした。

- ・単元中の残りの部分は、オンラインでの課題などの扱いとしてカバーする。

・授業として全く扱っていない単元は、新学期後の授業(コミュニケーション英語Ⅲなど)において、投げ込み教材として扱う。

3.1.2 定期考査への不安についての対応

成績とも密接に関連する定期考査の扱いは、生徒が最も大きな不安を感じていた点である。スローラーナーを多く抱えるという事情ゆえ、多くの生徒が進級に関する不安を口にしながらの臨時休業直面である。一番大きな不安なのだから、それを解消するためには生徒と直接、会話をすることが重要だと考えた。この時期は、担任として受けもつ生徒の健康状態を電話連絡にて把握することが定められていたことも相まって、一週間のうち複数回、健康観察をする機会を活用し、定期考査の扱いに関する連絡を、生徒本人に直接伝えた。

定期考査に関する本校としての、特に外国語科としての方針を以下に示す。

- ・臨時休業までの授業内での取り組みを評価材料とする（小テストや提出物などを含む）
- ・臨時休業までのパフォーマンステストを評価材料とする（スピーチやプレゼンテーション）

加えて、この時期は進級に影響を及ぼすことが考えられる生徒がいる場合には、感染症拡大予防に最大限配慮しながら、かつ他教科とも連携し、個別登校のうえ学習指導が認められていた時期であったため、生徒が登校し学習する日もあった。

このように補習的な授業と定期考査について、臨時休業前期という早い段階で方針を決めることができ、教科内で共有、他教科とすぐに調整できたことは良かった点である。また、臨時休業も長くなればなるほど、不安に感じるポイントが変化してくる。以下に述べる部活動と、その他の不安点については主に臨時休業後期に関連する点である。

3.1.3 部活動への不安についての対応

勉強に苦手意識を抱える生徒の割合が多い本校ではあるが、その一方で部活動に情熱を注いでいる生徒も少なからず存在する。臨時休業を受けて、部活動も一旦全面停止となったが、各種報道等でも話題となった通り、競技・種目毎の練習方法を工夫するアプリケーションを生徒が自らダウンロードし活用することや、動画配信サイトを見ながらプロアスリートが紹介してくれる自宅でできる練習方法を実践することで、筆者が顧問を務める運動部の生徒は各々が体力の維持向上に努めた。定期的に生徒同士でトレーニングの方法や内容について情報交換していたことや、複数名での簡単なミーティングも実施していたことを、学校再開後に耳にした。オンライン上でも、やはり顔を合わせることで、孤独な自主トレーニングやトレーニング方法に関する不安といった悩みの解決する糸口にもなったとのことである。そのように部活動に熱心に取り組む生徒の不安への対応として取り組んだことを以下に示す。

- ・運動部顧問として

不定期ではあるが、google classroom³や部内で連絡係を務める生徒を通じて、全体へ向けて、そして必要に応じて個人へ向けて、再開に向けて準備しておいて欲しい事柄や、練習及び大会における今後の見通しについて情報を発信した。

・担任として

臨時休業が明けたのち、生徒の様子を見ながら、複数回面談を実施した。臨時休業中は主として顧問などと面談の機会があった生徒たちであるが、最上級生としてこの一年間を少しでも前向きに送って欲しいという思いから、担任としての面談も実施した。面談の機会を設けることで、全ての悩みを解決できるわけではないが、本音を打ち明けてもよい場所があること、話を聞くだけでも生徒の気持ちが楽にすることができるという側面がある。

実際のところ、主に運動部の生徒を中心として、全国高等学校総合体育大会（「インターハイ」）や、春のセンバツ（「選抜高等学校野球大会」）、そして夏の甲子園（「全国高等学校野球選手権大会」）などが中止を余儀なくされたことから相当なインパクトを受け、多くの生徒が落胆していることが分かった。そのような気持ちを理解したうえで授業や学校生活全般を通じて新たなクラスで生徒間の人間関係、生徒と担任との人間関係をいかに築きあげていくかという点も、重要な点として把握できた。

3.1.4 その他の不安についての対応

上述の点以外で生徒が最も不安を抱えていた点は、やはり進路活動の面である。表1に示すとおり、四年制大学、短期大学、専門学校などと種別関係なく、入試方法やオープンキャンパスの実施方法などあらゆる点で変更が相次ぎ、その情報量に振り回された感は否めない。今年度に限っては変更点の変更などのお知らせも日常化してしまったように思える。

このような状況で大切にしたい点は「正確な情報を基に生徒、家庭と連携を密にしていく」という点である。担任としては、進路指導を担うグループ（分掌）と情報を共有し、場合によっては生徒の方が先に情報を得てくるパターンもあったので、関係各所と内容を確認して他の生徒とも共有することや、同じ分野へ進学を考えている生徒を呼び出し、説明や情報提供する場面もあった。今年度最大の問題点は、多くの変更点を示しながらも入学者選抜試験の要項発表などが例年よりも遅く、試験日程はほぼ変わらないという時間的な問題点であった。限られた時間的制約のなか、学校としてのチームワークをベースに、放課後など生徒と充分話ができる時間や場所を確保することに苦勞しつつ、学年や校務分掌関係なく、多くの同僚との協力のうえ、現在進行形で生徒とともに進路を切り拓いている最中である。

ここまで、まずは生徒の不安を可能な限り取り除くことで授業に臨む姿勢が整うという考えのもと、臨時休業中の生徒の不安の整理及びそれらへの対応をみてきた。

以下は臨時休業を経験しわかってきた、どのような学習支援と授業改善が求められているのかという点を、本校英語科や学年団の中の英語科の観点から考察していく。

3.2 学習支援

臨時休業前期では、英語科として緊急措置的な課題を学年共通で出した。教科書を使って自習させるのではなく、単語中心の課題とした。実施予定だった学年末試験範

囲において、テスト問題を今回の課題としてリサイクルする視点からである。また、普段から取り組んでいる形式での課題に取り組むということが、生徒に必要以上の負担や混乱を生じさせない点で重要であった。仮に教科書を使用する形にしても、今回の緊急事態宣言発令から臨時休業決定までの時間において、あらゆる科目の教科書を持って帰らせることが難しかった実情もある。

しかしながら5月の大型連休前後に臨時休業延長が要請され、その期間に応じた課題の追加が必須となった。新学年で使用予定の教科書が生徒の手に届いていない教科もあるなか、英語科の強みとして3学年でも2学年時に使用した教材を継続使用するという点があるため、その点を活かした副教材からの課題など、これも普段から取り組んできた形式で課した。

3.2.1 ICT 機器の活用

臨時休業前期は、課題を指示し、期限を登校日に設定し回収・点検・返却がベースとなっていたが、この方法では効率と教育効果に限界がある。感染症拡大の状況に鑑み、登校日を設けてはいけないと求められた瞬間、機能不全に陥る。そこで状況改善に有益なのが ICT 活用の視点だ。追加課題を生徒に知らせるための手段として、学校ホームページをまず思いつくが、残念ながら自校のホームページを閲覧することを習慣とする生徒はごく少数であるため、学校と家庭・生徒を繋ぐ連絡通知アプリと学校ホームページを同時活用した。事実、臨時休業突入後、図らずも連絡通知アプリへの生徒・保護者ともに登録率がかなり伸びた。それにより教科書販売日程や google classroom へのログイン方法など周知が幾分、簡易化できた。追加課題の内容について恥を忍んで述べると、本校でも遅ればせながらこの臨時休業中前期に ICT 活用の波が一気に加速した。それまでも google classroom の活用へ向けて準備を進めていたところだったが、授業内で具体的な活用を試みる寸前で臨時休業を迎えた点が悔やまれる。そのことを議論する間もなく、いよいよ活用一択となり、当時交代制で出校日を割り当てられた教員は校内 ICT を担うグループから講義を受け、試行錯誤の中、動き始めた。実践しながら学んでいくことの重要性を痛感した時期でもある。時間とともに軌道に乗り始めたが、それでも見切り発車とならぬよう、セキュリティー面及びプライバシー保護の観点に配慮しながら、同時に授業改善の面から他教科と切磋琢磨のうえ ICT 活用を進めた。個人的にはオンライン授業は大変便利なツールであるが、実践することと、そこから得られる教育効果については分けて考えるべきだと感じ、現在においても勉強すべき点が多い。この点については稿を改めたい。

臨時休業後期は健康観察・進路に関わる内容などは電話面談での方法を残しつつ、ICT 化との棲み分けを進めながら、google classroom での課題のやり取り、youtube での限定公開動画配信のみならず hangouts meet⁴ 等を用いての簡単なショートホームルームを試みた。

以下は臨時休業後期に、本校英語科が取り組んだ実践の具体である。学年により身につけさせたい力が異なるがゆえ、実践も異なるが、結果としてそれが授業改善へ向けて教科内で切磋琢磨できるという副産物をもたらしたことは特筆に値する。

- ・ google classroom と youtube を連動させた speaking 指導

- ・副教材に付随するアプリケーションを用いた単語学習
- ・google form を用いた単語確認テスト
- ・google classroom を用いた writing 添削
- ・家庭学習に有効な学習サイトやアプリケーションの紹介
- ・教科書の音読を音声データとして提出する課題

上述の取り組みに加え、第3学年では受験に関する説明動画を教員が交代で自作のうえ不定期に配信することもあった。どの課題も取り組ませるために課すのではないため、その目的や使用方法を説明するための準備、場合によってはモデルの提示などが必要となるが、教員間や教科間で教え合い、学び合いながら ICT 活用へ邁進した。学校や教員自身がまさに「学びに向かう力」を試されている時期でもあった。しかし、慣れてくると各教科が次々と課題を配信し、また課題の締め切り日までは共有できていなかったことから生徒に大きな負担を掛ける期間が生じてしまったことは大きな反省点であった。課題を出すペースや一度に出す量についてはオンライン学習のみならず普段から留意しておく点であることを再認識させられた。

3.2.2 ICT 活用の課題とその対応

google classroom 上での課題の受け渡しだけに焦点を当てても、家庭環境の差が教育格差を生むという問題が生じる。

- ・家庭にパソコンやスマートフォンなどを使うことのできる環境が整っていない
- ・保護者も在宅勤務が増え、加えて兄弟（小中高大問わず）もそれぞれの学校で同じような課題が出ているため、例えば台数の問題などから自分が思うようにパソコンやスマートフォンなどに向き合う時間が確保できにくい
- ・回線の契約内容のためか、Wi-Fi の通信環境が定まらず不便な点がある

これらへの対応については、当然全てを解決できないが、学校として可能な限りの対応はしたつもりである。例えば、紙媒体としての課題を全学年・全生徒へ郵送すること。同時に県の支援策として、家庭無線 LAN 環境と情報端末機器の所持について電話連絡等で確認し、所持していない生徒については Wi-Fi モバイルルーター、ChromeBook[®] をそれぞれ貸与するという制度を活用することである。

3.2.3 成果と反省

臨時休業明けに教科として、学校として臨時休業期間内の授業の進め方や課題の内容等について振り返る機会があった。ここでは教員の視点から、英語科内での振り返りに特化して本校の成果と反省をまとめる。

<成果>

- ・（英語科として、または個人として）授業の在り方を考え直すよい機会となった
- ・ICT 機器利用への抵抗感が減少した
- ・本校生徒の得意とする学習方法や苦手とする学習方法を再認識できた

- ・他教科の様子を知ることができ、教科横断型授業へのきっかけを掴んだ
- ・オンラインでの授業も対面での授業も大事にすることは変わらないという点を再認識

- ・教員間の連帯感が増した

<反省>

- ・適切な課題の内容，量，ペースの再検討
- ・オンライン上の学習ではどこまで教員が関わり，どこから自分の力で取り組ませるべきか見極めが難しい
- ・課題に取り組まない生徒へのアプローチ
- ・(オンラインに限らず)ライティング課題の添削については工夫が必要
- ・臨時休業が明けたときの授業の進め方の検討(ペアワークやグループワークの方法など)
- ・家庭学習と授業内容をいかにリンクさせるか

他教科における成果と反省も踏まえ、現在は、若手教員を中心とした校内の授業作りプロジェクトチーム(自主団体)と、本年度年次研修を受講中の教員が中心となって、再度臨時休業に直面した際のよりよい対応の在り方や、次年度以降の校内研究のテーマなどを検討するなど、活発に議論する土壌が固められつつある。繰り返すが、この難局を乗り越えるために奮闘すること自体が我々にとって、学びに向かう研修のようなものであり、省察と実践を積み重ねるなかで目の前の生徒の英語力向上に資する授業改善が生まれるのである。

4. まとめ

休校を明けて、改めて見えてきた点を述べてまとめに代える。

まず、オンライン上での授業であっても対面式の授業であっても授業の本質は変わらないという点である。生徒の全人的な成長や自己実現に資するための英語力向上のために、学校で、そして授業でできることや授業でなければならないことと、家庭学習で行って欲しいことを棲み分けし、そのために今必要なことは何かを見極める眼をもちたい。そのためには、やはり双方向的な授業展開が必要になる。授業デザインを日々アップデートすることや、教員間での目線合わせ、そのために必要な情報収集、教員としての継続的な学びが必要である。自分が成長することが授業改善に繋がり、その授業を通じて結果として生徒に力をつけるという形で還元できるサイクルの確立を目指したい。その際にはアンケートをはじめとする生徒の「声」にも真摯に耳を傾けたい。

次に、焦らず、自信をもって授業する心構えである。休業が長引いた分、教科書を早く進めたくなる時期もあるかもしれないが、そこは自分でブレーキをかけ、「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」という基本に立ち返りたい。そこでは、必然的に生徒が教科書から答えを見つけるのではなく、自分の頭で考えて答えを導き出すプロセスが生まれる。特にスローラーナーにおいては、授業中に何度も学習に躓くことになるかもしれない。そこでこちらが簡単に手を差しのべるのではなく、あえて生徒が自力で立ち上がることを待ちたい。こちらが我慢することで生徒が自ら学習に立

ち向かう時間が生まれる。その時間に英語学習者としての成長があると信じ、その先に立ち上がった生徒をさらに伸ばすための授業準備をすべきである。それが授業改善である。

最後に、現下の学校授業における今後の方向性である。いつ、再度の臨時休業が要請されるかわからないという不安と隣り合わせのなかでどのように授業を進めるべきかという問いについて、オンライン型と対面型を組み合わせたハイブリッド型授業を提案する。最初から大きな仕掛けを作ろうとするのではなく、対面型の授業のなかでスマートフォンやタブレット型端末などを、ルールを定めたうえで活用することから始めたい。少人数授業を展開できる学校であれば、別室で授業を受けている生徒同士を画面上でつなぎ、会話練習などに工夫して取り組むことは、感染症拡大予防にも配慮した、かつ生徒にも良い刺激となる形式である。状況に応じてALTの協力を得ると授業にも活気が出てくる。

今もなお、見えない敵と昼夜問わず闘ってくださっているエッセンシャルワーカーの方々への感謝の気持ちを忘れず、学校として感染症拡大予防に最大限努めながら、かつ、今後の社会で異質性を有する他者と対話をもって問題解決に取り組むことができる学習者の育成のため、継続して授業改善に取り組みたい。

注 1 アルファベットの認識に困難を覚えるような、初期段階から英語学習に躓いている学習者などを指す場合もあるが、本稿では、様々な学力レベルの学習者が集まる学校、特に教室内において英語の学習に躓いている生徒を想定している。

2 記述回答されたもの(オンライン上での回答を含める)の中から筆者が主立った意見を各項目3点ずつに集約させた。書かれた内容については文意を損なわない程度に筆者が簡易化させたものを記載している。

3 google が提供する授業プラットフォームのひとつ。

4 G suite ユーザー向けのウェブ会議サービス。現 Google Meet。

5 Google の chrome OS を搭載したコンピューター。

参考資料

松尾真太郎 (2020) 「臨時休業に直面した高校3年生への対応—学習支援と今後の方針」『英語教育』Vol.69 No.4 (pp.34-35) 東京：大修館書店。